

先端

科学

総研大の現場から

古今和歌集1100年、新古今和歌集900年、源氏物語千年紀などが盛大に催され、来年には方丈記成立800年が予定されている。祭り好きは日本人だけではないと思われるが、祭り騒ぎにすることで人は動き、お金も動く。そこに経済的な意味以外に何の意味があるのか、じっくり考えてもわからないことが多い。それに比べると親鸞聖人750年遠忌や法然上人800年遠忌はやや静かに進んでいる感じがする。宗教的には、騒ぐ「浮かれる」ことを

人は無目的には思考しない。何らかの必要があって、何とかしたいという思いがあつて思考する。その時にしっかりと踏まえるものがなければならぬ。文化科学ではそれは資料にほかならない。それも、多くは古典なのだ。日常のわれわれは多くの領域で「適当」に構える。

なかむら・やすお 総合研究大学院大学教授。文化科学研究科日本文学研究専攻長。文学博士(神戸大学)。国文学研究資料館教授。専門は歴史物語。国文学データベースなど情報処理にも携わる。

て、今の自分の醜態を見つめ、おさましい限りだが、そこで乗り越えるべき自分が見えたのなら成長できる。

文化科学で言えば、それが祭りであれ何であれ、今とにかく一つのテーマで資料なり知識なりをできるだけ見て思考する。ブームであつても、真実を見る機会として捉えることができれば、ブームも無意味ではない。「今」を知ることが次の一歩への進歩を可能にする。「今」を知るための必須の資料が古典だということなのだ。あちらこちらで催されている展示に出かけるのも、この目で見えるものをしっかりと見るためだ。大きさも、色も、内容も、すべての代でもある。



総合研究大学院大学
日本文学研究専攻長

中村 康夫

あまり良しとしないのかもしれない。ブームだ祭りだといって追いかけるのは、私に言わせれば、人の後ろからついていつているだけのこと、時代の先頭を意図しているわけではない。時代の先頭にいるためには、そういう世の中

の構えは人にも迷惑をかける。しかし「適当」は正確な理解を妨げる。つまり、非科学的なのだ。何となくわかっている。こういふ適当感、いいかげんさが実は人間の成長を止める。

のうわべには一切目もくれず、新しいことも視野に入れながら真実をめぐって思考しているしかない。机上の学問の世界ではなく、生身の人間にも成長が必要だといわれることがある。市川海老蔵は大きな事件に巻き込まれ

源氏物語「若紫の巻」。光源氏が北山で小さいころの紫の上を垣間見る有名な場面。分かりにくいですが、右手上方に雀(すずめ)が飛んで逃げていく(国文学研究資料館蔵「源氏物語团扇画帖」から)

